『破戒』『坊つちやん』研究に関する一考察

―その〈学校小説〉の観点をめぐって―

村田一晟

はじめに

明治三九年の小説に『破戒』『坊つちやん』がある。現在、これらについては数多くの先行研究が見られるが、『破戒』『坊つちやん』はいずれも主人公が教師であり、学校を舞台として物語は展開しているにも関わらず、主人公の教師像や描かれる学校社会に焦点を当てた論は僅少であるという事実がある。

それでは、数少ないそうした論は各作品の研究史においてどのような状況下に置かれているのだろうか。本稿では、作品に描かれる教師像や学校社会への視点を〈学校小説〉の観点として規定し、各作品研究における〈学校小説〉の観点から考察された研究の成果やその置かれた状況について検討するとともに、明治期の小説研究における〈学校小説〉の観点の今後の在り方について所見を述べることを目的とする。

その方法として、まずは各作品の先行研究を概観し、そのうえで〈学校小説〉の観点から考察された論を取り立てることで、各作品の研究史のなかでそうした論がどのような状況にあるのかを明らかにしていく。そして、上記の方法によって明らかにした結果をもとに、「おわりに」のなかで先に挙げた疑問を解消することで、本稿の目的を果たすこととする。ただし、各作品の先行研究については、『破戒』はその共通した評価ごとに、『坊つちやん』はその発表された年代順にそれぞれ配列し、検討していくこととする。

一　『破戒』研究

『破戒』研究史を取りあげるにあたって、まずは本格的な『破戒』論の出発点と目される平野謙「明治文学評論史の一齣――『破戒』を繞る問題――」（『学芸』七三号、昭和三八年二月）[1]に焦点を当てる必要がある。平野氏の論は、藤村の「私は自分の内にも外にも新しく頭を持ち上げて来た鬱勃とした精神でこの作を貫くべく決心した」（『長篇小説全集』第六巻「序にかえて」）[2]という語りにおける「鬱勃とした精神」という一語に着目するところから始まる。氏はこの「鬱勃とした精神」を、日露戦争を基軸とする時代の空気に、戦争にかける切迫した国民意識と藤村の逼迫した意識とをこめて称した含み多い言葉とし

てとらえる。その一方、『破戒』に対する二十八の同時代評を検討したうえで、同時代評が全体として『破戒』を社会的偏見に対する抗議としてとらえるか、自意識上の相剋の表出としてとらえるかの二契機に分断されているという状況に疑義を呈する。この問題に対し、氏は藤村の「緑蔭雑話」(『読売新聞』明治三九年四月九日)、「『破戒』の著者が見たる山国の新平民」(『文庫』明治三九年六月)を参照し、

部落出身の知的な一青年を主人公に設定し、その人間典型を中心にして、「従来小説等には全然看過されて居た生活問題」にまで掘りさげることによって、第一には特殊な人間群に対する社会的偏見を一個「新しい悲劇」にまで泛びあがらせると同時に、第二に西欧近代文学の主潮と思われた「新しき個人」の知性と感性との相剋、その「自意識」上の葛藤をそこに絡みあわせること、このふたつの契機を統合したところに『破戒』は産まれたのである。

と論じる。

以上のように、平野氏の論は『破戒』研究における二契機の統一的解釈を狙ったものであったが、その提言とは裏腹に、その後の『破戒』研究は部落民問題をとりあげた社会小説、もしくは自我の内面を追求した告白小説といった二つの評価から脱することが出来ないまま展開されていくこととなる。

『破戒』を社会小説としてとらえる立場には、猪野謙二、北原泰作、野間宏の各論がある。

猪野氏は「「破戒」覺え書」(『文学』第十四巻第九号、昭和二一年九月)の中で、『破戒』を「(猪子蓮太郎の)目ざめた意識と、保守的なその時代の風俗――忍従に依てかりそめの平穏を希ふの人々と之を迫害する因襲的な社會と――との葛藤が丑松自身の生長を通じて描かれてゐる」物語としてとらえる。この認識を土台として丑松の告白に着目し、物語展開に伴って、従来丑松が有していた封建的な階級意識が彼にとっての不自由な桎梏となり、それに代わる新しい対立関係の中に何時しか入り込まねばならないという意識の反映の過程を丑松の告白は如実に示していると指摘する。それと同時に、丑松の〈破戒〉は「「他人に依て衣食する腰掛の人間」であることをやめ、告白に依て何物をも失ふことのない無産者意識を獲得すること」であると論じる。

こうした猪野氏の着眼とは異なり、北原泰作は『破戒』の部落民問題を深く掘り下げる形で論を展開する。氏は「『破戒』と部落解放運動」(『文学』第二二巻第三号、昭和二九年三月)[3]において、『破戒』は「差別される部落民の問題を人間解放の社会問題として把握した小説」であるとし、丑松の告白とその結末から小説の「人間解放」について考察する。そこでは、丑松の告白は穢多という自身の身分を披歴して許しを乞う卑屈な態度のもとで敢行されたものであり、さらに丑松は部落民に対する社会の不合理な差別を解消するために闘おうとはせず、新たな生活をテキサスで築くために日本を離れるという結末となっていることから、『破戒』における「人間解放」の思想は極めて不徹底な展開で終息しているという指摘がなされている。

北原氏の指摘と同様に、野間氏も岩波文庫出版『破戒』(昭和三二年)の解説「「破戒」について」の中で、丑松のテキサ

ス行きは不合理な社会からの逃亡に他ならず、ここに『破戒』が部落民の問題を取りあげて日本で最初の近代小説を確立しようとしながら、逆に多くの部落の人々を傷つけてきた原因があると考察している。だが、ここで上記の考察以上に氏の論で注目すべきは、先の猪野氏や北原氏の論にはない、藤村が部落民丑松を小説の主人公として据えた意義という観点から『破戒』の社会性を検討している点であろう。氏は「『破戒』は日本の封建制のゆえに同じ人間でありながら他の人間から差別されるという封建的な不合理を日本の悲劇として取り上げている」と述べる。そのような、作品に描かれた「封建的な不合理」を、天皇制の確立によって天皇とは対極をなす身分階級に属する部落民が卑しめられた事実と重ねてとらえ、「藤村は明治の時代になってもなお差別される部落民丑松を主人公として選び、その心の悲しみを描いて日本の軍国主義、天皇制にするどくせまって行くのである」との見解を述べる。

これら社会小説とする立場からの各論に対し、『破戒』を告白小説としてとらえる立場からは、佐藤春夫、和田勤吾、吉田精一の各論が挙げられる。

佐藤氏は「藤村と自然主義運動――「破戒」に就て――」(『明治大正文学研究』季刊一号、昭和二四年六月)[3]で、「丑松の壓迫を二の次のものと見て、第一の主題をその題の通りに解して丑松が父の教にそむいてまでも、自分の身の上の眞實を明かさう、明かさなければならないとするその心情に對する同感が藤村をして破戒を書かせ、從つて讀者に訴へようとした主題もこれなのである」とする見方を示し、これをもって『破戒』を心境小説ないしは身辺小説としてとらえる。このことを踏まえて、詩を捨てなければならない状況下で想起した、詩を志した当時の心境を、小説という形で表現しようとしたことこそが藤村の『破戒』執筆の動機であると自身の見解を述べる。

先の佐藤氏の見解に対し、和田氏も「「破戒」の史的位置――その制作に信州の及ぼせる意味にふれて――」(『国語・国文研究』第三号、昭和二六年五月)の中で妥当な推論であると首肯し、『破戒』に描かれた告白と猜疑との苦悩の姿こそ、詩には表現しきれない散文の世界のものであると述べる。そこで氏は、『破戒』の主軸は丑松の告白によって支えられているとして、「そこでは「告白」に重點があるのであつて「部落民」はそれを重からしめるための方法として使われている」ということを指摘する。こうした作品の自己告白性についての検討を通して、『破戒』を当時はまだ一般社会的に醜いものとされた赤裸々な人間の心を、主人公である丑松を通して露呈したものとして把握する。そして、藤村の中で自己の真実を告白しなければならない苦悶が作品の上に結晶し、そこに自らも破戒をしようとする藤村のモチーフが生じてきて、この作品に結びつくのではないかと結論づける。

また、吉田氏も先に示した和田氏の解釈に準拠する形で論を展開する。氏は「「破戒」の出現」(『自然主義の研究　下巻』、昭和三三年)において、先に提示した和田氏の解釈「そこでは「告白」に重點があるのであつて「部落民」はそれを重からしめるための方法として使われている」を引き、『破戒』を真摯な人生問題として主題をつかんだ、藤村自身の自我の告白と苦

悩を秘めた小説としてとらえる。同時に、「矛盾の社会的解決は、丑松を社会との蓮太郎的闘争へ、即ち部落解放運動の門出へ導かず、テキサス行きといふ一種の社会外への小説的解決に終らせることにもなつた」とする瀬沼茂樹の指摘（瀬沼氏の論についてはのちに詳述する）に対し、部落差別という社会の封建的観念との闘いを、丑松の内部葛藤といういわば丑松の中の封建的なものとの闘いに移し、むしろ内面の苦悩を強調した点に『破戒』の近代性をみることができると異論を呈する。これらを踏まえて、

　明治三十年代に於て内田魯庵、川上眉山、広津柳浪、小栗風葉、小杉天外、徳富芦花（ママ）、木下尚江等その他に於て次第に顕著になりつつあつた社会文学的志向、文学に於ける社会的要素や社会問題的な意味をさらに広くもしくは深くほり下げた意味で、長篇としてはこの種の文学の一応のうちとめとなつたとともに、それを単なる自己の外の社会問題としてのみ見ず、自我の苦悩の告白に重点をきりかへた点に於て、「破戒」は新旧両時代の転回点となつたといふことができる

と、告白小説であるがゆえの『破戒』の文学的意義を見出す。

かくして、『破戒』を社会小説としてとらえるか、または告白小説としてとらえるかという二極化した見方に拘泥した論は展開されていったのであるが、特にこれらの論が提出されたのちに、平野氏の意図した二契機の統一的解釈を意識した論が多数発表されることになる。それに伴い、二契機の統一的解釈を意識した論は『破戒』研究の主流となっていく。とはいえ、その主流化の過程を詳細に見ていくと、その統一的解釈を意識した各論のなかにも、単純にそのいずれの立場をもとらないことを示すのみにとどまるものから、さらに統一的解釈のための手立てを論じるものへと発展していくという趨勢が見られる。

まず、瀬沼茂樹の『島崎藤村』（昭和二四年）では、藤村が『破戒』で市民社会の封建的環境を描き、そこに部落出身の瀬川丑松を置いたこと、そしてそれを主題として取りあげたことにその社会的意図をうかがうことができるとする指摘がなされている。この指摘は一見社会小説としてとらえる立場を支持するものであるかにみえるが、しかしこれは「この小説の郷土性や社會性の根柢にあつてこれを統一し發展していくものは、丑松の戒律への叛逆を、内部精神の葛藤において展開していく、その自己告白性である」という考察を含意するものであった。そして氏はこの「自己告白性」についてさらに考察を加える。作品において父の戒律をめぐる丑松の問題は、藤村の執筆当時の社会的認識の限界もあって、丑松個人の人生問題として取りあげられるとともに、戒律への叛逆が社会への闘いとしてではなく、自我の苦悩の問題に転化していった。この転化により、小説での戒律をめぐる問題の社会的解決は、封建的社会における被差別階級としての部落民を解放へ導く方向には向かわずして、テキサス行きという社会外への小説的解決に走らせるという結果になったと論じる。

先に挙げた瀬沼氏と同じく、中村光夫も二契機のいずれの立場をもとらない。中村氏は「風俗小説論（上）――近代リアリズムの発生」（『文芸』二月号、昭和二五年二月）[3]で、『破戒』

は一方では部落民に対する偏見という生々しい社会問題をとらえるとともに、他方ではこれを、破戒することで新たな生活に臨もうとする新時代の覚醒した個人と、破戒をとどまることで従来の生活に安住しようとする旧思想との衝突という丑松の内部葛藤の苦悶に結びつけることで、社会の生きた問題を内面から描破しようとしたものだととらえる。だがこれは、藤村にとって部落民に対する偏見という社会問題は彼の義憤を喚起させる不正である以前に、その犠牲者となる丑松の心情を自己の分身として重ねるきっかけであったことから、丑松を「自己の孤独の生きた人間像と化し得た」という含みをもつ解釈であった。このような自身の理解を中村氏は「丑松は部落民の青年としてはっきりした客観性を持つには、あまりに作者の「主観的感慨」の傀儡でありすぎ、逆に作者の孤独な魂を托すべき人間としては社会の背景からの浮きだしかたが足りず、観察で汲みあげられた淡すぎる影でしか」なかったとして、作品の不完全性に触れる形で集約する。

これまで見てきたように、瀬沼、中村両氏の論は二契機のいずれの立場をもとらないことのみにとどまり、そこから二契機の統一的解釈に資する指摘をなすまでには至らなかった。

それに対し、三好行雄は「「破戒」論への試み」(『島崎藤村論』、昭和四一年)において、従来の研究に対して「社会小説か自己告白かという設問自体が無意味なのであつて、真に必要なのは、「破戒」を現に書かれてある全体として評価する新しい基軸の発見である」と異議を唱えるとともに、そのためには「部落民の条件を必須とする瀬川丑松の意味を、小説の内的構造に即して統一的に捉えなおす」必要があると述べる。そしてその「部落民の条件」を単に告白のための条件ではなく、主人公ひいては小説を成立させるための基本的条件として位置づけ、「「破戒」をつらぬく小説の軸心は部落民丑松をおそう社会の迫害と宿命への恐怖、つまり外と内との二様の危機を描きながら、苦悩の心理的救抜としての告白に収斂する」[6]と結論づける。

三好氏と同じく、平岡敏夫もまたその統一的解釈への手立てについて見解を述べている。平岡氏は「『破戒』私論」(『東洋研究』第二三号、昭和四五年六月)[7]の中で、先に挙げた平野氏の『破戒』論における「特徴的なことは、『破戒』生成の二契機を統一的に把へることにほとんどすべての評価が失敗してゐる事実である」という指摘をもとに、「『破戒』生成の二契機を統一的に把へる」ためには、藤村が語った「鬱勃とした精神」という含み多い言葉の意味するものを『破戒』内部の検討のなかから見出す必要があると提言する。そのうえで、告白小説としての立場をとる和田氏の指摘「そこでは「告白」に重点があるのであつて「部落民」はそれを重からしめるための方法として使われている」に対し、丑松が他ならぬ部落民であるが故に告白が深刻な問題となるのであって、その苦悩や告白の存在が逆に部落民問題を指し示すことになると反論する。そして、これまで問われてきた作品における社会的抗議と自意識上の相剋は、まさに自意識上の相剋の結果としての告白、土下座とみることによって社会的抗議たり得るという形で一体となっていると主張するとともに、「社会小説か、告白小説かではなく、告

白小説たることによって社会小説たり得たのであり、「自意識上の相剋」を痛切に描くことで、深い「社会的抗議」を示しているのである」と換言して結論としている。

この他にも、川端俊英[8]が統一的解釈の鍵として部落民問題に着目し、

『破戒』は、人間的な生き方を圧殺する明治社会の諸矛盾の一典型としての部落問題を一身に背負って生きる丑松を主人公として設定し、その丑松の眼醒めたるがゆえの悲しみが自意識上の組剋（ママ）として内向する反面、社会的抗議として外向し、それが相互に作用し合う関係で一体化しているとみることはできないか

と提起しているなど、『破戒』はその統一的解釈の視点から深く掘り下げられていくこととなった。

さて、これまで『破戒』研究における二契機の統一的解釈の主流化をたどってきたが、その反面こうした流れに対して批判的な論もみられるようになる。

その例として、宇佐美毅は「『破戒』――作品の〈統一的把握〉という制度――」（『国文学　解釈と鑑賞』第五五巻第四号、平成二年四月）の中で、「作品の統一的な把握といった呪縛からは一時解放されねばならないはずである」と述べる。そのうえで、丑松が「告白によってテキサス移住と志保の理解という「告白による救済」を獲得して作品が終結する」ことに着目する。そして、作品後半の急速な告白への傾斜という作品構造上の非統一性は、作品の執筆過程において藤村が「告白による救済」という主題を発見し、それを被差別部落出身の青年丑松の悲劇にではなく、自己の青春に希求していくという藤村の内的葛藤が表出した結果であるととらえる。

その後の研究を見ると、例えば高橋昌子[9]は作品本文中の「社会の罪人と思へ」という丑松の言葉に着目し、作品内での丑松の告白やテキサス行きには罪人意識が伴うことを指摘するなど、従来は議論の中心であった二契機の統一的解釈とは離れた、多様な視点からの論がなされている。

以上、『破戒』研究の動向をたどってきたわけだが、概括すると、これらの研究は『破戒』を社会小説として扱うか、もしくは告白小説として扱うかの二者択一に陥ることとなったが、その後それらを統一的に把握する見方がなされるようになり、結果としてその統一的把握が主流となっていった。だが、そうした流れに否定的な論も見られるようになるとともに、近年では従来議論の中心となってきた二契機の統一的な把握とは離れた論が目立つようになったと約言できる。では、このような研究史のなかで、『破戒』を〈学校小説〉の観点から考察した研究はどのような立ち位置に置かれているのだろうか。この問題の解決のために、何はさておきそれに該当する研究をみてみよう。

まず該当する研究として先鞭をつけた、小林英一「教育小説としての『破戒』論――信州教育界との関連について――」（『長野』第六一号、昭和四十年五月）[10]を挙げる。小林氏の論は、教育小説の概念は、家永三郎の「学校教員とそのおかれた社会的状況とのかかわりを主題とした作品」であるが、『破戒』の主題はそれではない。しかし、「明治憲法下の学

校教員の実態をリアルに描き出し」、「教育界の実態に対する鋭い批判的態度を汪溢せしめる」点では、家永によって教育小説として挙げられた『教師の自由』などと、『破戒』とは一致している。ここであえて表題に教育小説の辞を使用する次第である

と、家永氏が提示する教育小説の定義を使用する意図を述べるところから始まる。そのうえで氏は作品に見られる「教育界の実態に対する鋭い批判的態度」は藤村が小諸義塾の教育、経営に対する諸方面からの圧迫を受け止める立場にあったことが関係しているとするなど、執筆当時の長野県教育界の動向や作品のモデルといった背景から、『破戒』の教育小説性について考察している。

その後、佐野美津男が『小説のなかの教師』（昭和五六年）所収「島崎藤村『破戒』教育不在の教師小説」で、『破戒』のなかの子どもは「おしなべて、無邪気であり、あどけな」く描かれており、このことから『破戒』の子どもたちは藤村によって観念的に固定化されていると把握できるという点や、藤村の童話作品のなかに子どもの論理を構築しようとしたものが見当たらないことから、『破戒』は子ども観が欠如した小説であるとみることができ、それゆえに教育不在の教師小説と化していると述べる。

しかし、子どもは不在であるとするこの見方に対し、渡邊巳三郎は「教師としての丑松・教育小説としての『破戒』」（『部落問題研究』第一一二巻、平成三年八月）の中で佐野氏の論を峻拒し、たとえ一面的な描写であるにしても丑松は子どもたちに慕われていたと見解を述べる。そのうえで、丑松の教師像について

言うまでもなく、丑松の時代には、教員組合運動はもち論、民主的な教育実践の活動も存在しなかった。しかし、不十分とは言え、丑松の教育は校長や郡視学が標榜する軍国主義的、天皇制教育ではなく、より良い未来を目指した、子供達の為の教育が心にあったのではないのか。自分自身が差別に苦しみ、それからの脱却を願う気持は、どうしても仙太や、敬之進の息子など、弱い立場の人々や子供達に注ぐ、丑松の暖かい目に、条件がととのえば民主的な教育に進み得る良心的な教師の相貌を、読み取ることができるのである

と論じている。

先の各論とは異なり、丑松の告白に着目した論として、千田洋幸「告白・教室・権力―『破戒』の構図―」（『東京学芸大学紀要第二部門　人文科学』第四八号、平成九年二月）が挙げられる。この論では、丑松の告白は彼が教師として告白することによって、教師―生徒というあらかじめ枠づけられた権力関係のなかでの独白という行為と化しているのであり、すなわち安定した関係において行われた自己慰撫の衝動に根ざした感情と行動でしかないとの指摘がなされている。

さて、先に〈学校小説〉の観点から考察された四つの研究を挙げたが、少なくとも先の二つの論は提出された当時主流となった作品の社会性と告白性という二契機の統一的解釈とは一線を画した異質な論として世に登場したことがうかがい知れ

る。その後統一的解釈から離れた論が多数みられるようになったことから、再度〈学校小説〉の観点から試みられた研究として後の二つの論を把握することはできるが、これに伴いこれら四つの論の共通点として、従来の研究が一切踏まえられていないことが挙げられる。

確かに二契機の統一的解釈という視点からの考察は完結に近い状況に陥っているが、それらの研究が一時『破戒』研究において主流となったことは無視し得ない事実である。つまり、『破戒』研究には依然としてその統一的解釈という観点が影を落としているのである。こうした状況下にあるために、従来の研究が踏まえられていない〈学校小説〉の観点からの研究は軽視を余儀なくされることとなったと言える。

二　『坊っちゃん』研究

相原和邦が「『坊っちゃん』論」（『日本文学』第二二巻第二号、昭和四八年二月）で述べたように、「『坊っちゃん』は愛すべき読物ではあっても正面から論ずるに足りない作品だという見方が、従来多くの漱石論者の通念となっていた」状況下で、『坊っちゃん』研究史における最初の本格的な作品論として登場したのが、平岡敏夫「『坊っちゃん』試論――小日向の養源寺――」（『文学』第三九巻第一号、昭和四六年一月）[1]である。平岡氏は、読者が『坊っちゃん』の物語の構造によって正義漢で明るい坊っちゃんだけを見るよう仕向けられているという読みの状況に対し、小説の末尾に注意を向けることで、坊っちゃんは死ぬという対称的な坊っちゃん像が浮かび上がってくると指摘する。つまり、四国の中学を辞職するに至ったほどの正義漢である坊っちゃんが街鉄の技手として無事平穏に暮らしていることは坊っちゃんの性格の一貫性を欠くことであり、「帰京して街鉄にとどまっている坊っちゃんはウソであり、坊っちゃんは死んだのである」と氏は論じる。このいわゆる〈暗い坊っちゃん像〉という新たな示唆はその後の『坊っちゃん』研究に影響をもたらしていくこととなった。

平岡氏はまた、教師としての坊っちゃんに着目して論を展開する。氏は特に教師である坊っちゃんが抱く生徒との連帯意識に着目し、『雲は天才である』の新田耕助とは対称的に、坊っちゃんは生徒との間の連帯を敢えて断ち切ることで中学生批判をより痛烈なものとしていると指摘する。さらにこの点について、「生徒を無視・否定する教師という矛盾的存在がもつ「正直」のエネルギーが、「駆け上るやうな」文体を生み出し、なまじっかのリアリズムのとうてい及ばぬ日本文学におけるまったく独自の教師像をつくり出したのではないか」と言及する。

その後、内田道雄は「諷語と笑いと――「坊っちゃん」論」（『国文学　解釈と教材の研究』第二一巻第一四号、昭和五一年一一月）において、『坊っちゃん』が読者にもたらす笑いの構造を明らかにしようと試み、その笑いの誘因を漱石の造語である「諷語」に見出す。すなわち、「諷語」が「①広義に於ける諷刺（批判的モチーフをもった作品）の言語」と規定できること、「②作品・作品のことばが表裏の二義性を持つこと」、「③滑稽（笑い）を表出するとともにそれが終始「真面目なもの」

（批評性）を伴うこと」という性質を有するがゆえに、『坊つちやん』に笑いがもたらされると論じる。

このように内田氏は作品の笑いの構造を中心に論じたが、その中で「要するにこの作品は一人称小説なのである」と作品の一人称性についても触れている。この『坊つちやん』の一人称の語りに注目したのが、中島国彦「坊っちゃんの「性分」、『坊つちやん』の性格――一人称の機能をめぐって――」（『日本文学』第二七巻第一一号、昭和五三年一一月）[12]である。この論では、「親譲りの無鉄砲」といった坊っちゃんの性格についての言及は作中に数多く散りばめられているが、それらの言及はあくまで主人公の性格の外側からの説明や規定にすぎず、作品世界に生きる主人公への把握から生じたものとはいえないとする。つまり主人公の性格は初めから作られて一つの観念としてあるのではなく、坊っちゃんのなまの語りによって「作品の中で息づき、その物語を生き切った時初めて生きたものとなる」のである。換言すれば、坊っちゃんの一人称の語りが読者に機能して主人公の性格が生み出されるのであって、「一人称の形式こそ、それを根元から支えるものとなっている」として、作品が一人称の語りをとる意義を述べている。そしてこの論を皮切りに、その後の『坊つちやん』研究は坊っちゃんの語りに着目した論に傾倒していくこととなる。

このような画期的な作品研究が進められていく中、川嶋至は平岡氏と同様に、教師としての坊っちゃんという側面から作品を検討していく。川嶋氏は「学校小説としての『坊つちやん』」（『講座夏目漱石第二巻』、昭和五六年）の中で、『坊つちやん』を学校小説として読んだとき、その世界は漱石が自己の教育観に基づいて執筆した『中学改良策』を裏返しにして戯画化したもの、すなわち「改良を要する中学の憂うべき状態の具現化」だと言うことができると指摘する。そして、漱石は坊っちゃんを正直で純粋な、上等な人物として肯定する反面、漱石の教師嫌いによって教育者として適正なものとはしなかったことから、「坊っちゃんを肯定的人物として描けば描くほど、教育者としては失格せざるをえない」状況が生じたとした。このために、坊っちゃんの教師像は「正義漢でありながら生徒に冷淡な失格教師というちぐはぐな像」を結ぶ結果となったと論じる。

さて、平岡氏による〈暗い坊っちゃん像〉の考察については先に示したとおりであるが、この考察に示唆を得た論に、有光隆司「『坊つちやん』の構造――悲劇の方法について――」（『国語と国文学』第五九巻第八号、昭和五七年八月）がある。この論は、〈笑い〉と〈批評性〉という二重機構を語り手である坊っちゃん自身の性格に帰そうとする内田氏の論に疑問を抱き、機構の二重性や平岡氏の示した作品の暗さについては「むしろ、「語り」の機能を巧妙に包摂した、作品世界の構造それ自体のうちに、明るさと暗さという二重性の秘密を探るべきではないか」と提言するところから始まる。そして、こんにち一般化している、『坊つちやん』という作品を坊っちゃんの挫折と敗北の物語とする見方に対し、四国の中学校と彼との間には抜き差しならない関わりなど一切なかったことから、坊っちゃんはこの物語の中でなんら挫折も敗北もしていないと反論するとともに、彼は「一貫して、作品冒頭に紹介された、明るい喜

劇の世界に生きつづけている」と見解を述べる。こうした、坊っちゃんが演じる物語における表層の喜劇を通して、物語内で語られる遠山令嬢をめぐる古賀の悲劇や、鉄拳制裁による堀田の教員生活における挫折といった「悲劇役者たちの世界」が透けて見えるとして、『坊つちやん』に内包された物語の二重構造を明らかにした。

先ほど、中島氏の論以降『坊つちやん』研究は作品の語りに着目した論に傾倒していくと述べたが、正確には前に示した有光氏以降、小森陽一の論をはじめとして、作品の語りをもとに考察された論が多数提出されることになる。小森氏は「裏表のある言葉（上）――『坊つちやん』における〈語り〉の構造――」（『日本文学』第三二巻第三号、昭和五八年三月）で、『坊つちやん』の語り手が自らの行為を主観的に理由づける「……から……した」という語り口を手掛かりに論を展開する。この語り口は、作品の語りには常に語り手の行動の理由を問い詰める潜在的な聞き手が想定されていることを示すものである。しかしその聞き手とは、語り手の示す理由を納得してくれるであろう、語り手の想定した聞き手であるとともに、語り手の行動を無闇であると批評する、語り手の想定を超えた常識をもった聞き手でもあった。この聞き手の内包する二重性によって、「一方では語り手が要請しているレベルでの〈常識〉をもった聞き手として、黙って彼の言うことに納得したふりをしながら、他方では内心本来の常識者としてこの語り手の非常識性に笑いを洩らす」という「二重の（裏表のある）応対関係」が語り手―読者間に生じると小森氏は指摘する。加えて後者の「内心本来の常識者としてこの語り手の非常識性に笑いを洩らす」潜在化された読者の性質について、まず第一章と末尾での語りとは異なり、教師体験を語る二章以降での語りは語られる時点の〈今〉に即した語りであるという、第一章並びに末尾と二章以降における時間・空間構造の齟齬を示す。これにより、二章以降で語り手の主観的で単純なものの見方に即して語られる赤シャツや野だ、狸等のその俗物性を笑う読者は、その行為自体が語り手の単純さを笑うことであるということを意識しない、すなわち潜在化していた常識者としての立場からの笑いがこの行為によって顕在化するということを意識せずに笑うという状況に読者は陥る。だが、語り手自身がその常識を有しておらず、本質的な自己認識が欠けているために、「読者は〈常識ある他者〉としての自己の位置を対象化せずに語り手を笑うと同時に、彼を笑う赤シャツや野だをも笑うことができる」という、語りの構造の二重性が生じることを指摘する。

このように、物語の構造と語りとを対応させて作品における語りの構造の二重性について言及した小森氏であったが、石原千秋も同様に物語の構造と語りに注目して、作品に内在する清と坊っちゃんの〈山の手志向〉について論究する。石原氏の論「『坊つちやん』の山の手」（『文学』第五四巻第八号、昭和六一年八月）は、東京での出来事の報告となっている第一章全文と最終章の一節を、清をめぐる『坊つちやん』の〈枠〉として位置づけ、その〈枠〉には清と坊っちゃんの〈山の手志向〉が存在していたとするところから始まる。そしてその二人の〈山の手志向〉は、第一章で語り手が無鉄砲な自分の行く先を早々と

語ってしまうことによって、読者はそれ以降彼の語る内容すべてを失敗談として読むことを強いられるために、読者は「二章以下の〈山の手志向〉を〈坊っちゃん〉とは全く相容れないものとして意識的に異化する一方で、〈坊っちゃん〉の中の〈山の手志向〉は意味を結ばずに意識の周縁に追いやってしまう」という語り手の語りの問題点を指摘する。

一方、亀井秀雄は『坊っちゃん』における語り手の自称「おれ」に焦点を当てて作品を考察する。亀井氏は「『坊っちゃん』――「おれ」の位置・「おれ」への欲望」(『国文学　解釈と教材の研究』第三七巻第五号、平成四年五月)の中で、語り手が選択した自称〈おれ〉を「きわめて意図的に選ばれた、語りの機能」としてとらえる。そこで作品内での語り手の呼称〈坊っちゃん〉に視点を移し、作品内では赤シャツや野だの示すような、もともとの甘やかされて育った世間知らずといったネガティブな語義とは別に、正直で純粋な人、単純や真率といった肯定的な語義が〈坊っちゃん〉には内包されていることを明示する。そしてそれは清による保証のもとで成り立つものであって、読者がテクストのイメージから作り上げるその肯定的な語義はまさに「「おれ」の語り口によってニュアンス変換された結果」であるとする。つまり、語り手の教員生活談は〈坊っちゃん〉という呼称を、清に保証された呼び名として肯定的に受け止めていく過程であったとし、したがって彼の教員生活談は「清がのぞむ「坊っちゃん」像を自分が引き受ける物語」だったと指摘する。その上で、街鉄の技手という立場から〈おれ〉という自称を選びとって語られる語り手の回想談は「その小市民的な状況の拘束からの一種の脱自的解放として、清にとっての「坊っちゃん」であった過去の、無垢な情念のままに打算抜きで行動しえた「おれ」の物語を再構成」した、彼にとっての「一回かぎりの語り」であったと論じる。

ところで、先に『坊っちゃん』の第一章全文と最終章の一節を語りの〈枠〉として位置づけた石原氏の論を挙げたが、この指摘に示唆を得た論に、菅聡子「『坊っちゃん』を〈読むこと〉」(『漱石研究』第一二号、平成一一年一〇月)がある。菅氏は『坊っちゃん』を「〈読むこと〉に対する問題意識をすぐれて喚起するテクスト」として位置づける。そして『坊っちゃん』の語りの構造の特質として、小森氏が指摘した、現在の〈おれ〉という語りの枠組みが第一章と末尾との照応によって示される中、二章以降が〈今〉に即して語られ、語る現在の〈おれ〉が後景に退くという時間・空間的齟齬によって、過去の自分が現在の自分によって分析または批評されるという事態が生じなくなるとの見解を述べる。そしてその結果、第一章並びに末尾が現在の語り手の自己認識であるのに対し、二章以降末尾までが過去の浅い認識であるという語り手の認識の深化のプロセスと、読書行為の時間内で読者が受け取る記述の印象度は逆行することになるという、読書行為の視点から換言すると「基本的には単線的に進むことが想定される読書行為の時間的プロセスと、『坊っちゃん』の語りの構造との間にはずれがある」という読みの問題が発生する。そしてこのずれこそが、『坊っちゃん』を読むことにおける多様性が生じる原因であるととらえる。

以上、時系列に沿って『坊つちやん』研究を概観してきたが、概括すると本格的な『坊つちやん』論は平岡氏にはじまり、内田氏の論を皮切りに作品の〈語り〉を基幹に据えた論がその枢軸となっていったと言える。

ここで改めて『坊つちやん』を〈学校小説〉の観点から考察した平岡・川嶋両氏の論を振り返ると、先に見た『破戒』研究におけるそれとは異なり、特に坊っちゃんの歪な教師像やその駆け上がるような文体が生じる原因を明らかにした点において、『坊つちやん』研究のなかでは大きな意義を持つものであると言える。ただし、その後〈学校小説〉の観点から論じられた研究として、越智悦子「漱石の見た学校世界――〈坊っちゃん〉という教師――」(『文学・語学』第一一五号、昭和六二年一二月)が提出されるが、この論は『坊つちやん』創作のテーマを、漱石が嫌悪した学校の形式主義、画一主義といった実態や、学校が制度として有する弊害を描くことであったと主張するにとどまるものであった。この点において、川嶋氏の論以降、〈学校小説〉の観点からは『坊つちやん』研究における主要な論は提出されていないと言わざるを得ない。さらに、その研究数が相対的に乏しいことからも、〈学校小説〉の観点からの研究は軽視されている状況にあると言える。

確かに川嶋氏の論より後は作品の〈語り〉に主眼を置いた研究が主流化していったために、先に示した二つの状況が生じたと推測することはできる。だが、いずれにせよ〈学校小説〉の観点からの研究は『坊つちやん』研究において先駆的なものではあっても、その基盤をなすものとはならず、その後の研究からは閑却されるといった状況に陥ったことは否めないのである。

おわりに

これまで『破戒』『坊つちやん』研究を概観し、その中で〈学校小説〉の観点からの研究が如何なる状況にあったかについて考察してきたが、ここで改めてそれぞれの要点を押さえておきたい。

まず『破戒』研究については、その社会小説性、もしくは告白小説性といった、いずれかの評価から講じられた論が展開され、その後それらの統一的評価をなす論が主流となっていった。しかし、その評価に疑義を呈する論が提出されるとともに、統一的評価とは離れた論が提出されるようになるという過程をたどった。ここで〈学校小説〉の観点からの研究に焦点を当てると、これらは従来の研究を度外視して論が展開されており、したがってそれらは『破戒』研究の基幹とは切り離された存在としての位置づけがなされることとなった。

次に『坊つちやん』研究は、本格的な作品論である平岡氏の論にはじまり、その後内田氏の論を皮切りに作品の〈語り〉を基幹に据えた論が展開されていくこととなった。この研究の趨勢において〈学校小説〉の観点からの研究を俯瞰してみると、それらは先駆的な研究ではあってもその基盤をなすものとはならず、その後の研究からは閑却されるという状況に陥ることとなったと言える。

ここで、先にまとめた〈学校小説〉の観点による研究が陥っ

た状況について二作品を統括して検討してみると、これらの研究の意義はそれぞれの主流となる研究によって軽視されてきたと言うことができよう。だが、このことを別の角度からとらえると、その主流となる研究はし尽くされてきたのに対し、〈学校小説〉の観点からの研究は十分になされてこなかったと言えるのではないか。

また、こうした研究状況に対して出原隆俊は「『破戒』を新たに論じようとすること。それは、逆説的に言えば、これまでの『破戒』論議にむしろ無知に近いことによって、素手で、作中に散りばめられている諸要素を拾い集め、『破戒』の作品としての全体像に接近することから可能になってくるのではないだろうか」と意向を述べる。[13] これまでの研究をほとんど無視する形で論を進めるべきという意見に対しては異存があるが、先に示した状況下でこのような姿勢をもとに作品を論じていくことは、作品研究の深化において極めて重要な行為である。そして、この出原氏の意向は『破戒』研究に対するものではあるが、先に示したとおり同様な研究状況にある『坊つちやん』にも等しく言えることである。だからこそ、今後先に論じてきた二作品を取りあげて論じるにあたって、「諸要素」ではあるかもしれないが、研究が十分になされてはいない〈学校小説〉の観点から作品を論じていくことは作品研究の一つの手立てとして有効であると言える。

さらにこれらの研究で用いた〈学校小説〉の観点を先の二作品の研究に限らず、明治三九年ないしは明治期というより大きな枠組みの内にとらえて論じていくことは、特に教師や学校が舞台となる各作品を横断的に論じるうえで有効な手立てとなる。ただし、そうした観点を明治三十九年という枠組みの内にとらえる場合、『破戒』『坊つちやん』のみならず、二作品と同年の明治三九年の小説で、学校社会や教師の様相を中心に描いた『雲は天才である』を加えて論じていくことが不可欠となる。今後は『破戒』『坊つちやん』を〈学校小説〉の観点から検討していくとともに、それと併せて『雲は天才である』を取りあげて論じていくことで、従来の明治小説研究に新たな視点をもたらすことができるのではないだろうか。

尚、最後になったが本稿作成に際して御指導を頂いた新保邦寛先生に対し、厚く御礼申し上げたい。

註

(1) 本稿では、『島崎藤村―人と文学―』(昭和三五年)を参照
(2) 本文は『島崎藤村―人と文学―』(昭和三五年)からの引用
(3) 本稿では、『日本文学研究資料叢書　島崎藤村』(昭和四六年)を参照。なお、北原泰作は当論発表当時、部落解放同盟に所属している。おそらく部落解放運動に携わる人々の見解を代表して北原氏の論が『文学』において発表されたのだろう。
(4) 本稿では、『近代日本文学の展望』(昭和二五年)を参照
(5) 本稿では、『鑑賞日本現代文学第四巻　島崎藤村』(昭和五七年)所収「近代リアリズムの発生」を参照
(6) 三好は壮松の告白について、「告白は、宿命に領略された自己の内面を奪還する試みであり、宿命を制御しながら現実へ反噬し、破滅に瀕した自我を救抜する最後の方法であった」と指摘している。
(7) 本稿では、『日本文学研究資料叢書　島崎藤村』(昭和四六年)を参照
(8) 川端俊英「『破戒』の社会性――評価の統一をめざして――」(『日本

文学』第二八巻第八号、昭和五四年八月）

（9）髙橋昌子「『破戒』における「社会の罪人」」（『島崎藤村研究』第三二巻、平成一六年　九月）

（10）本稿では、『藤村文学への新しい視座』（昭和五四年）所収を参照

（11）本稿では、『「坊つちやん」の世界』（平成四年）所収「小日向の糞源寺――「坊つちやん」試論――」を参照

（12）本稿では、『漱石作品論集成第二巻　坊っちゃん・草枕』（平成二年）所収を参照

（13）出原隆俊「蓮華寺の鐘――『破戒』読解の試み――」（『国語国文』第五六巻第一号、昭和六二年一月）

引用および参考文献

〔『破戒』研究〕

出原隆俊「蓮華寺の鐘――『破戒』読解の試み――」『国語国文』第五六巻第一号、昭和六二年一月、臨川書店

猪野謙二「『破戒』覺え書」『文学』第十四巻第九号、昭和二一年九月、岩波書店

宇佐美毅「『破戒』――作品の〈統一的把握〉という制度――」『国文学　解釈と鑑賞』第五五巻第四号、平成二年四月、至文堂

川端俊英「『破戒』の社会性――評価の統一をめざして――」『日本文学』第二八巻第八号、昭和五四年八月、日本文学協会

北原泰作『「破戒」と部落解放運動』日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　島崎藤村』、昭和四六年、有精堂

小林英一「教育小説としての『破戒』論――信州教育界との関連について――」東栄蔵編『藤村文学への新しい視座』、昭和五四年、信州白樺

佐藤春夫「藤村と自然主義運動――「破戒」に就て――」佐藤春夫『近代日本文学の展望』、昭和二五年、講談社

佐野美津男「島崎藤村『破戒』教育不在の教師小説」佐野美津男『小説のなかの教師』、昭和五六年、日本評論社

瀬沼茂樹『島崎藤村』、昭和二四年、世界評論社

髙橋昌子「『破戒』における「社会の罪人」」『島崎藤村研究』第三二巻、平成一六年九月、双文社出版

千田洋幸「告白・教室・権力――『破戒』の構図――」『東京学芸大学紀要第二部門　人文科学』第四八号、平成九年二月、東京学芸大学

津田　潔（編）「小説『破戒』参考文献目録」『部落問題研究』第一一二巻、平成三年八月、部落問題研究所

中村光夫「風俗小説論（上）――近代リアリズムの発生」十川信介編『鑑賞日本現代文学第四巻　島崎藤村』、昭和五七年、角川書店

野間　宏「『破戒』について」『破戒』、昭和三二年、岩波書店

平岡敏夫「『破戒』私論」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　島崎藤村』、昭和四六年、有精堂

平野　謙「明治文学評論史の一齣――『破戒』を続る問題――」平野謙『島崎藤村――人と文学――』、昭和三五年、新潮文庫

三好行雄「『破戒』論への試み」三好行雄『島崎藤村論』、昭和四一年、至文堂

吉田精一「『破戒』の出現」吉田精一『自然主義の研究　下巻』、昭和三三年、東京堂

和田勤吾「『破戒』の史的位置――その制作に信州の及ぼせる意味にふれて――」『国語・国文研究』第三号、昭和二六年五月、北海道国文学会

渡邊巳三郎「教師としての丑松・教育小説としての『破戒』」『部落問題研究』第一一二巻、平成三年八月、部落問題研究所

〔『坊つちやん』研究〕

相原和邦「『坊つちやん』論」『日本文学』第二二巻第二号、昭和四八年二月、日本文学協会

有光隆司「『坊つちやん』の構造――悲劇の方法について――」『国語と国文学』第五九巻第八号、昭和五七年八月、東京大学国語国文学会

石原千秋「『坊つちやん』の山の手」『文学』第五四巻第八号、昭和六一年八月、岩波書店

内田道雄「諷語と笑いと――「坊つちやん」論」『国文学　解釈と教材の研究』第二二巻第一四号、昭和五一年一一月、学灯社

越智悦子「漱石の見た学校世界――〈坊っちゃん〉という教師――」『文学・語学』第一一五号、昭和六二年一二月、全国大学国語国文学会

亀井秀雄「『坊つちやん』――「おれ」の位置・「おれ」への欲望」『国文学　解釈と教材の研究』第三七巻第五号、平成四年五月、学灯社

川嶋　至「学校小説としての『坊っちゃん』」三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳編『講座夏目漱石第二巻』、昭和五六年、有斐閣
菅　聡子「『坊っちゃん』を〈読むこと〉」『漱石研究』第一二号、平成一一年一〇月、翰林書房
小森陽一「裏表のある言葉（上）――『坊っちゃん』における〈語り〉の構造――」『日本文学』第三二巻第三号、昭和五八年三月、日本文学協会
小森陽一「裏表のある言葉（下）――『坊っちゃん』における〈語り〉の構造――」『日本文学』第三二巻第四号、昭和五八年四月、日本文学協会
中島国彦「坊っちゃんの「性分」、『坊っちゃん』の性格――一人称の機能をめぐって――」片岡豊・小森陽一編『漱石作品論集成第二巻　坊っちゃん・草枕』、平成二年、桜楓社
平岡敏夫「小日向の養源寺――「坊っちゃん」試論――」平岡敏夫『「坊っちゃん」の世界』、平成四年、塙書房
丸尾実子「『坊っちゃん』を読むベスト21」『漱石研究』第一二号、平成一一年一〇月、翰林書房

（むらた　いっせい　筑波大学大学院 修士課程 教育研究科）